
魔女の遺産相続

白兔 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の遺産相続

【Nコード】

N5687W

【作者名】

白兔 成

【あらすじ】

大陸にその名を轟かせたとある魔女が500年の生涯を閉じる姿を見届けて、さっさとお役御免……と思っていた彼女。それが契約解除早々、何故かベビシッターに！？まんまと魔女の計略にはめられた使い魔の奮闘記。

とある魔女の終わり

「今まで、世話になったわね。ありがとう」

「何、ネルがそんなに素直だと気持ち悪い……」

これ程にも長く仕えた主は久しぶりだ。それも後、数分で終わると思うと感慨深いものがある。

目の前に横たわる女は、知略の魔女として大陸に名を馳せた齡500を超える者だ。

「本当のことを言っているだけださ。お前は優秀な使い魔だった」
魔に染まっているとはいえ、所詮は人間。
枯れる時は必ず来る。何と儚いことか。

「アタシも久しぶりに楽しませてもらったよ。ありがとう」

これで、しばらくは私もお役御免だろう。

次第にネルの瞳が濁っていき、空っぽになっていくのを感じた。
幸せだったんだろう、死に顔も満足そうだ。

陽炎のように景色が揺れる部分をなぞると裂け目が入る。

裂け目から懐かしい魔の香りが溢れ、体を包む。

「サヨナラだ」

裂け目に足をかけ、潜ると、電流が弾けた。

1話

「……何？」

こんな現象、初めてなのだが。

あまりにも長い期間こっちに居たせいかな、そうであってくれな
いかな。

右手を裂け目へ入れる。

バチチツ

先程よりも小さな音と衝撃が走る。

「まさか」

まさか、でもこんな現象はソレしか知らない。

でもどうやって？

与えられた黒のローブの紐を解き、投げ捨てる。

胸元を肌蹴させれば、

「薄いけど、ある」

右胸には薄いけど、黒いインクがのたくった様な印が形を定めず動
き回っている。

「定まっていないのは正式な印じゃないからだろうけど」

使い魔は魔女と契約することで人間界に渡ることができる。

契約すれば契約印が互いの心臓の上に世界に一つしか存在しない

互いの印が現れ、互いの位置やらの諸々が分かる。

そして、その印があると魔は帰ることができない。

指で印を突きながら唱える。

「汝の場所を示せ」

こういう場合は本人にさっさと解放して貰うに限る。

無理やり引き剥がしたが為に代償として片眼が空洞になった者が知り合いにいる。

魔族が人間に比べて回復力があるとしても、中身が持ってかれたんじゃ再生しようがないのが実際のところだ。

心臓持っていかれた奴の話は聞いたことは無いが、持っていかれたら即死だから伝えようがない。

「そんな間拔けた死は御免だ」

目を閉じればそう遠くないところにあばら家があるらしい。

向こうは動く気配もなければ、話しかけても反応もしないといういい加減ぶり。

「契約違反者が偉そうにしゃがって」

時々いるのだ、魔女が魔族を一方的に使役するのが普通だと勘違いする奴が。

若さゆえに傲慢。

そこで対応を間違った魔女は不利な条件を付けられたりするので、若さは命取り。

「契約出来るようになったばかりの新米魔女」

引き戸を勢いよく開き、大きな音を立てる。

こういうのは最初にバシッとやってしまっに限る。

「契約とは対等に結ぶべきであって同意無しに結ぶものではないのは初歩だ」

こっちは出鼻を挫かれて不愉快極まりない。

交わした覚えのない契約のせいで帰るべき場所に帰れないなどい迷惑だ。

「……」

1話（後書き）

一つ一つを短めに、一定の投稿を目指そうと思います。

2話

「確かにこここの筈なのに」

隠れているのか。

「印が不安定なせいで印は役に立たないし」

互いの印は引かれ合う上に、どこに居ても視覚を共有できるようになっているのだが。

つながりが弱いせいか視覚はぼやけて何か判別できない。

一部屋しかない小屋に一体誰が隠れることができるというのだろうか。

「確かに匂うんだが」

魔の力には独特のにおいがある。

分かるのは魔の中でも、極一部だけでも。

何かを隠す為の術に違いない。

「用意周到に香り消しまで使いやがって」

この姿じゃ、限界か。

「狩りの天才舐めるなよ」

逃げ切れると思うな。

ざわり、と体が泡立つ感覚と共に体が縮んでいく。

にゃー

嗅覚が優れているのは本来なら犬だが、魔の匂いを嗅ぎ分けるのは猫に限る。

鼻を引くつかせて、ツンとくるアンモニア臭の発信源を探れば。

『柱時計？』

聴覚も格段に上がったせいか耳に着く一定音が響く。

はて、こんなあばら家にこんな立派なものがあるだろうか。

二、三回行ったり来たりを繰り返せば、奇妙なソレ。

どうやら振り子が見える部分の透明な板はガラスではないらしい。どの角度から見ても同じなのだ。

普通は角度を変えれば映り込む光の反射の仕方は変わる。

『ふうん、何か見たことある手口』
踊らされている感が否めない。

が、拘束を解いてもらえなければ帰れない。

試しに前足で膜を押せば足はガラスの中に埋まり、しつとりと水のようなものが纏わりつく。

どうやら、この中は異空間に繋がっているらしい。

前足を舐めると、

『塩辛い』

海の水、か。

深呼吸して思い切って頭から飛び込めば、暗い闇の中で奥に煌々とした光が見える。

姿を海蛇に変え、光を求める。

『捕まえてやる』

私を駆り立てるのは、本能だったに違いない。

3話

昔から言われてきたことがある。
おまえは狩りのこととなると熱くなりすぎる、と。

光の周りには球状の薄い膜が張っている。

どうやら、その中にある光が術士らしく印が薄く発光する。

長く引き伸ばした体で球体を囲み込む。

『私の勝ちだ。契約を解いてもらう』

中の光に直接呼びかけても反応は無い。

『まだ強情を張るつもりか、……ならば引きずり出すまで』

柔らかな膜に牙を突き立てる。

存外、簡単にシャボン玉が弾ける音がして光が自分の元へ落ちて来る。

『……………』

その存在に啞然とするのが早いか、異空間の異変に気付いたのが早いか。

光を抱くことに戸惑いは無い。異空間から連れ出すことも容易い。ただ、何とも苦い気持ちである。

「あの女、嵌めやがったな」

口から吐いた言葉は泡となり消えた。

手に持ったタオルは水滴る髪を拭き終われば燃え消えた。
目の前に横たわる死人を見やる。

「どこでこんな方法を見つけたが知らないが」
腕に抱かせた赤子はすやすやと眠っている。

「これは酷すぎやしないか」
もともと、この女は一国を滅亡に追いやる程の策士で。
先見の明に恵まれていたからこそその判断だろうか。
「おまえも、結局は人間の女で」
ただの人に戻った女の体は朽ちていく。

ミネルヴァの塔に戻ってきた時、一番最初に気が付いたことはミネルヴァの体の変化だった。

指先は白骨化、他は多少乾燥はしているが変わらないという奇妙な現象。

「人間の女が魔女になるのはまあ、簡単だからな」
人間の女が魔で体を覆うことで、魔女となる。

その時、魔が体の時を止めてしまうから若い姿のものが多いいのだ。

「解くことも、難しくは無い」
魔を放てば、緩やかに時は流れ始める。

「何故、そこまでして、産み落としたのか」
私には理解できない。

「死んでも、よかった、とでも言うのか」
緩やかに流れ始めた時は、体を蝕む。

末端部分から、500年の時が流れていけば、この現象にも説明が付く。

「人間の考えることは分からない」
確かに、小さな弱いものは庇護欲をそそり、愛しくもなる。

「私には分からない、それがお前達……人の子」
冷酷、無慈悲とまで歌われた魔女、ミネルヴァ。

「結局、お前も私には理解出来ぬ人間だったんだな」

「さて、次はお前の処遇について考えねば」
母親は骨と化した。

「お前の歳で契約を解く儀式などできないだろうな」

溜息をつき、赤子を抱き抱える。

「仕方あるまい、このウピスがそれまで面倒を見てやるっ」
片方が死ねばもう片方も冥界に送られる。

だからこそ、契約とは慎重に行わねばならない。
それが生まれたばかりの赤子とは。

不本意ながら運命共同体だ。

3話(後書き)

やっと、あらすじまで辿り着きました。

4話

不本意な契約から5年。

子供はすくすくと育つてきている。

中々に成長の早い人間は見ていて面白い。

……だが、見ていて面白いのは子供だけで、度々の訪問には嫌気がさしていた。

いつの時代も野心家な国王が納める国家は多々ある。

そんな国の使者が毎日のように訪れるのには正直忍耐がいるのだ。切り殺そうかと思つたことは一度や二度ではないが。

「私は国同士の争いごとに手を貸すほど愚かではない。一度手を貸せばその味をしめて、何度も通つてくるに決まっている」

これは500年の間に経験済みなので人間の心理を知らずとも分かる。

その時は確か大陸の1/4が焦土と化した。後で修復させられた苦勞は忘れていない。

何より争いごとに首を突っ込んで人間である契約者を危険にさらすことも避けたい。

それならば、早々に魔女にしてしまえばいいのだろうが、子供の成長を待たずしていきなり魔女にしてしまうのに多少の罪悪感があるのも確かなこと。

普通の人間とはか弱いから早く成長してほしい限りだ。

「どうしても、協力して頂けないのか？」

目の前の使者に会うのは何度目であるだろうか。

「何度も言わせるでない。お前達の言う名声も財も権力も興味が

ない」

人間の欲があればそそられる言葉なのかもしれないが、人の型を取っていても所詮違う生き物であるせいに興味がない。

「交渉は成立しないよ」

さつさと帰ってくれという気持ちを前面に押し出す。

そろそろ、子供が昼寝から起きる頃だ。

「それならば、仕方ない」

あっさりとした返事に拍子抜けするが、

「こちらも少々急いでおりまして」

男の一声で開いた扉に緊張が走った。

絶対不可侵のあばら家で昼寝をしている筈の子供が縄で縛られ、武官の恰好をした若い男に連れられて来たのである。

「今すぐにもお返事をいただきとうございます」

使者は自分の勝利を確信し、嫌らしい笑みを浮かべた。

「汚らわしい。私を脅すと言うのか」

無表情を取り繕う子供の眼にはうつすらと涙がたまっている。

「小さなその子を盾に、恥を知れ！」

思わず語気が荒くなるが、それさえも面白いらしい。

「噂は本当らしい。知略の魔女ミネルヴァは新しい少年使い魔に入れ込んでいる、と」

ソレは色々な勘違いだ、というツツコミを入れたいのをこらえる。

「その使い魔も能力は随分と低いようだ」

以前の使い魔との契約破棄は愚行でしたね、とせせら笑う。

「愚かな。貴様に魔の何が分かる？」

以前の使い魔が目の前に居るのにもかかわらず分からぬ上に、人の子と魔の違いも分からない。

そんな人間が私の養い子を馬鹿にするとは。

「死んで詫びるがいい」

少量の水を気管に送り込んだのだが途端に咳き込み始める使者は何が起きたのか分からない。

「今、貴様の体に毒を仕込んだ。さっさとこの森から出て行かぬと全身に毒が回るだろうな」

私も随分ひねくれてしまったものだ。

あれもこれもミネルヴァ、お前のせいだぞ。

私をウピスの名の通り、狩りの名手であり子供と弱者の守護者の本能を存分に利用するなどお前くらいだ。

「そのの、使者を置いて行くも連れて行くも自由にすればいい。が、使者の代りに国々へ伝えるがよい。これ以上、私を怒らせるな」と

使者を背負い、塔から離れていく男の姿に嫌な予感がする。

「マナナン・マク・リール、何故、小屋から出てきた」

ああ、とても嫌な予感がする。

5話(前書き)

一日空いてしまいました、すみません。

5話

「忌々しい奴め」

逃がすべきではなかった、と思っても仕方がない。

話を聞けば、あの武官装束の男が小屋のある森に侵入防止魔術が掛けているにもかかわらず侵入し、こともあるるか荒らしたのだという。

魔術の波動で目を覚ましたマナは私に知らせようと小屋を出たところ、扉の前に男がいて、捕まったというのが事の顛末らしい。

「やはりただの武官ではなかったか」

こちらに勘付かせず、森の中で何かをするとすればかなりの兵か。マナの赤く腫れた腕を見れば、かなりきつく縛られていたようだ。手を当てれば元の白い肌に戻る。このくらいなら別にどうともなるのだが。

「ウピス、怪我、ない？」

この少年が塔に向かった理由はただ一つ。

私としてはその行動のせいでヒヤヒヤした。

「他に怪我は無いのか」

最近はか弱いことだけじゃない。

無鉄砲で強情さが目立つようになった。

「聞いているのは、僕」

たどたどしい言葉とそぐわない強い瞳。

ローブの紐を取ろうとするのは私が施した術は治すものではなく移すものと知っているが為の行為。

無駄に頭が回るから困る。

追及の手を押さえる為に両腕を巻き込んで抱きしめる。

そうすると大人しくなるのは人間が母親を求める心情。

この子の想像通り、ローブを捲れば紅い縄の跡が付いている。

ソレを見ればどう思うかはもう分かり切っているから、人の心理を利用すればいい。

抱きしめる手は緩めず、柔らかな髪を優しく撫でる。

「私が強いことは知っているだろう。心配はいらない」

心も体も健全に成長し、魔に付け入る隙を与えない、それが魔女になる為の条件。

「僕は、弱い？」

見上げる瞳は先程と打って変わり揺れている。

私には理解できない生き物であるお前が強いのか、弱いのかなど分かる筈もなからう。

何が健全であるか、など魔の私が知るものか。

調べてはみたが体はともかく（まだ発展途上ということが分かった）心の方は分からずじまいだ。

色々、少なすぎる。

知識も、まともな人間も。

「マナ、この塔は少々不便だとは思わないか？」

また、聞いているのに無視したとむくれる姿。

寂しそうな表情に心が痛む。

ミネルヴァなら笑わせられたのだろうに、と。

そろそろ頃合いかもしれん、マナにも、私にも。

6話

「馬鹿者」

「何すんだ……！」

頭を抱え座り込んでもおとなお反抗的な目をする子供。

「反省が足りんようだな」

人間の成長は早い。

もう、私と頭一つ分しか変わらない。

「いつたい何度目だと思ってるんだ」

目線を外して周りを見渡す。

「言ってみろ、今度は何をしようとした？」

焼け野原を見て溜息をついた。

「篝火ひとつにそんな火力を使う者があるか！」

説教されるのが気に入らないらしく、そっぽを向く姿に苛立つ。

小さなマナがミネルヴァになっていく気がして気がかりだ。

あの悪巧みの為の頭の回転と火力、女王気質が身に付いたりしたら太刀打ちできる人間などいまい。

そうならぬよう躡とやらをせねば私でも抑えられないだろう。

襟首をひつつかみ引き寄せるとマナは思わずこちらに振り返った。
私はすう、と空気を体に満たして

「貴様は魔王にでもなる気か……！」

吐きだした。

行く先行く先を焼け野原にするつもりか、そうなのか！と思わずに
るを得ない。

村の人間が慣れて来たと思えばいつもこうなる。

広く構えた住居が全焼。

姿の見られない山奥ならまだしも（それでも大騒ぎに違いない）人里に下りてくれば人の容姿に人外の力。

「また、引つ越ししなくては」

顔を真つ赤にしたマナにやり過ぎたかとは思うが、この繰り返しのせいで定住はままならず、凶らずも流浪の民状態だ。

「いいじゃんか、わざわざ人里で無くても」

頭を垂れた隙に襟を掴んだ手を外し、両の手で私の手を包む。

人の気も知らないで何を言つかと顔を上げれば、若干眉尻が下がっているのが目に入った。

申し訳ないとは思っているらしい。

「グダグダ言っても起こったことは仕方ないな」

元々一所に長くは居れないのだから。

年端のいかない子供が魔術を扱うなど目立たない筈がない。

契約印は以前のまま心臓の上でのたくっているだけにもかかわらずこの威力。

本当に契約交わしたらどうなるやら。

頭の痛い思いでこれまた何度目かの復元魔法で借りた屋敷を修復し、最低限の荷物を持ち出す。

世に言う夜逃げだ。

いつものように転移魔術を展開するとこれまたいつものように絡みつく視線。

後方で香る魔力にアイツを思い出す。

「まさか、ね」

ありえないことだと頭の中から追い出した。

7話

「よお」

マナを下流にある村にお使いに出し、姿が見えなくなったところで声がかかる。

「何しに来た」

嗅ぎ慣れた魔力の持ち主に振り向かず、攻撃態勢を取る。体に纏う己の魔が渦巻く。

「久しぶりの再会だというのに、随分な挨拶だね」
何が久しぶりの再会だ。

「お前がここ数年私達を付け回していたことぐらい知っている」
軽薄な笑い声。

こんなにも憎たらしい奴だっただろうか。

「まあ、そんなことは想定内さ」

「さつさと失せる、私達に関わるな」

草を踏みわけ、こちらに近づく音がする。

「何だ、あの人間の子供が気に入ったのか」
肩を抱き寄せて耳元で囁く声。

「そんなにも面白いものか？」

私のもものより若干明るい茶髪が頬をくすぐる。

「見た所、仮契約もまともにしてないじゃないか」

肩越しに覗きこむアイスブルーが危ない光を宿す。

私が身動きをしないのを良いことに、腕の中に閉じ込めたかと思
うと、

「あの子を壊したら、お前はどんな顔をするのかな、アルテミウス？」
水流を指差す。

一点で水が堰き止められ、川が氾濫し始める。

「あの男は何者だ」

きよとんとした、青年に再度問う。

「数年前、使者の護衛官に扮してあの塔にやってきた男。あの国の者じゃないだろう」

別に、武官装束の癖に魔術を使ったからではない。

「しかもかなり身分が高い、違うか？」

合間を開けず続ける。

「そして、お前の契約主なんだろう？」

8話

「……どうした、答えられない程の強制力を持った術士には思えなかったが」

後ろの魔はかなりの実力者で召喚にも莫大な魔を必要とする上にこうして人の世に留まらせ続けるのにもかなりの魔を消費する。

「まあ、それなりにマズイことにも手、出してるしな」

一般的に美しい造りをしている為に、どのような表情も様になるのだが今の感情を一言にすれば、

「それはよつぼどのことだということか」
歪み、そのもの。

「俺達を召喚し続けて魔力の枯渇がない奴なんて化け物だ」

それをミネルヴァは平然とやってのけたから考えてこなかったが確かに。

「一応は上級だしな」

「一応じゃないし、俺達の力は特級ものだぞ」

それゆえに引き留めるのは難しく、必要な時に呼び出すのが基本だ。

「それで？あの子に危害を加えるのはアイツの命令か？」

唐突に彼女と俺の間にヒヤリとした冷気が走る。

「そんなに熱を上げてるのか」

「そんな冗談じゃ誤魔化される気にもならん。なんだ、それともお前ともあろうものが、あやつごときに後れを取ったか？」

契約主同士の制約は力の天秤の傾きによる……ようは押し負けたのかという皮肉。

「……あんな外道と比べるな」

外道、という言葉にギロリとこちらを睨む。

こんなにも強い視線を寄越す様な奴だったか？

これではまるで、

「雛を守る親鳥のようだな」

あの女に本能を利用して良いように使われているだけではないか。

ふん、と鼻を鳴らしたかと思えば、

「その通りかもしれないが、そんな経験も一度くらいは面白い」

「俺にはよく分からん」

これで、あの男の下に付く意味は無くなった。

「それが普通というものなのだろう」

彼女は500年もの間、人間界に縛られた上にその息子にまで縛られていると思っていた。

なのに、こんなにも楽しそうだ。

「こき使われてるのかも、なんて思った俺が馬鹿だった」

「は？」

これで、契約破棄ができる。

「だって、こんなにも異端だとは思わねえじゃんか、自分のい」

「ウピスから離れる」

目に入ったのは先程山を下って行った筈の少年。

濃い魔が渦巻いていた。

9話

凍えるような声が響く。

一瞬、誰の声か考えたものの間違いなくマナの声。

「もう一度言う、ウピスから離れる」

ギラギラと光る紺色の瞳は深海のように奥底を見せようとしな

「俺を狙ってきたのなら、そいつを狙うのは非効率だと思うが？」

昔から姿を変えないウピスが人ではないと理解したのはいつだったか。

その頃には魔の気配も少しずつ分かるようになっていた。

だから知っている。

こいつはいつも俺達を付け回している奴だ、と。

人型の魔は全体的に力が強い傾向にある。

勿論、ウピスも例外では無くて。

頼りがいのある保護者の彼女が姉に見られるようになって久しい。昔は何でも知っていると思っていた彼女が今では世界の一般常識を軽く飛び越える事を知り、危なっかしく思うようになった。

……それは俺が成長したってことだろうか。

隣の小川の水がうねるのを感じた。

「アポロン、やめてくれ!!その子は!」

まだ魔がうまく扱えないんだ　　渦巻く水が龍のように小川から飛び出してマナに襲いかかる。

咄嗟に近くにあった草花に送り込んだ魔。

間に合え、という気持ちと間に合わないという事実が一度に押し寄せる。

竜巻がマナを飲み込んだ、そう思って愕然としたその時。

「こんな手抜きで俺を倒そうなんて思うな」

内側から水 例えると蕾が花開く瞬間を見た気がする が円
を描きながら広がる。

僅かに足りなかったのだろう草花の壁が散って、水しぶきとともに降ってくる情景は幻想的だ。

「遊ぶつもりは無い、さっさと彼女を解放しろ」

「何でお前に指図されなきゃいけないんだろっね？」

険悪な二人に挟まれて夢の世界から引き戻されると、腕の中から難なくすり抜けてマナの元へ向かう。

「落ち着きなさい」

両頬に手を当てて私と目が合うように顔を上げさせる。

頭半分しか変わらないのだが体制的にはきついのかもしれない、ぴたりと動きを止めた。

振り向くこともせず、言い放つ。

今、目の前にあるものが私の守るもの、他はいらない。

「アポロン、これ以上のことをするなら、私が相手をするにしよう」

力は同等、何が起こるかは予測不能。

「とつても楽しそうだろう？」

怒りに震える声が人の子に対する思い入れを存分に感じさせる。

それも、俺よりも大切だと言わんばかりだ。

ここまでキているアルテミスを見たことはない 正直、面白くない。

が、これ以上刺激するはも得策ではない。

「悪かったって、もう手えだしたりしねーから怒るなって」

正面对決となれば手加減すれば俺が消し飛ぶし、かといって、

「可愛い妹に傷は付けたくねーし」

妹、と言ったか？

「なら、仮にも可愛い妹の守護対象を襲うっていうのはどうなんだ、アポロン」

「兄上もしくはお兄様と呼べ」

そんな声を聞きながらじゃれる（アポロンの一方通行のようではあるが）二人をよく観察すると、似ていると言えた。

まず、さらりとした質の良い布のような亜麻色の髪。

瞳の色はアイスブルーとモスグリーンだが目の形はよく似ている。どうやら兄妹というのは本当らしかった。

「で、そのお兄様は何しに来たんだ」

じゃれる兄を無理やり引き剥がして本題に戻る。

どう見ても戦意は無いようだから、余計に分からない。

「お前の契約主の子供を攫って来いって言われたから、適当に気絶させて拉致ろうと考えてた」

「とんでもないことを言うね。私から逃げられると思ってたのか？」

正直、力の差は拮抗しているから奇襲されたらマズイと思うが。

「元々はそういうつもりだったんだけどさ、契約印が無かったしどこで見たんだというツツコミを押さえて続きを促す。」

「元々いけ好かない奴だったしな、粗を探しはしてた。俺の考えでは守護対象者なら攫う必要は無いと思うんだよね」

こちらの言い回しに気が付いて契約外に持ち込んだらしい。

「大体、条件で契約したってのにこの不当な扱いだし？さっきも言ったけどお前を敵に回したくないからやめるわ」

気になるのはそれだけじゃない。

「マナを付け狙う理由に心当たりは無いか？」

塔を出て10年ほど経つ。

今までのしつこい勧誘のわりには期間が空きすぎているのが不自然だ。

「マナを人質にとってミネルヴァを従わせようとか考えているとかか？」

不自然な点はあるもののそれが一番に浮かぶ。

「いや？お前達が塔から出て行って3か月足らずでミネルヴァを追うのはやめたようだったな」

意外な返答におや、と思うのを感じ取ったのだろう。

「お前の会ったってという男、純粋な力は無いが　目は確かだ」

表情をコロコロと変える兄ではあるが基本は柔らかな表情である。それが、嫌悪に満ちたものであることに嫌な予感がした。

「外道とかそれなりにマズイことか？」

先程から気になっていた彼らしくない言葉に頷く。

「あの男はかなり趣味が悪い」

顔を顰めて、放った言葉は私を凍らせた。

「　　あの男は魔女の血をすするんだ」

11話

「そんな野郎のところにマナをやるうとしてたのか、お前は！」
急に俺の姿を隠すように抱きしめられる。

今も昔も扱いはそう大して変わらない。

俺は成長しているってのに、いつまでも小さな子供扱いだ。

実際、魔である彼女は1000年以上生きていることになるらしいから、赤ん坊と変わらないと思っっているのだろうが。

何というか、この差は一生狭まることがないのではないかと言う不安に包まれる。

「こつちだつてお前の事情なんか知らなかったんだ、仕方ねーだろ？ 普通、今の状態見たら完つ全黒だ」

そう、互いの心臓の上にある印は黒い渦を描き続けている。

ウピスが言うことには俺が母親の腹の中に居た時に契約の移行を行ったのではないかと睨んでいて、正式に契約しなくては解除もできないらしい。

契約の移行も互いの了解がマナーで、この状況では契約違反のこと。

「そらな、最初はミネルヴァに腹も立てた」

そんな自分の母の名はミネルヴァ。

負け戦を勝ち戦に変えるとまで言われた『知略の魔女』、だったらしい。

冷酷、無慈悲の権化であったその人が自身の命と引き換えに俺を産み落としたと語る彼女は、いつも人間というものは理解できないと締めくくる。

「だが、永久に流れるこの命……多少の娯楽は必要だろう？」

そう、一緒に居るのはただの気まぐれ、長い時を生きる彼女の暇つぶし。

「理解できないな、ただの面倒事としか感じられない」

そう切り捨てるアポロンと名の魔の考え方に賛同する自分。

なのに、彼女の酔狂がいつ終止符を打つのか、ソレを考えると顔も知らぬ母に付けられた鎖を手放そうとは思えなくなる自分がいる。

「アイツ行動も普通じゃねーし、馬鹿だけど。お前がミネルヴァじゃねーこともお前の方が使い魔だって分かってたからな」

「そいつがまた何でマナを……」

とにかく、身を隠さなければなるまい。

「原因はお前自身だよ、アル」

久々に呼ばれた愛称に馬鹿にされた感がある。

「お前と契約を結べる程の奴は少ない。そのガキもかなりのやり手と思うのが普通だろ」

「なら、そのやり手に挑むのは無謀と思うのが普通だろう?」

負けじと言い返せば、カラカラと笑う。

「自信があるからに決まっているだろう?」

「アイツには俺以外に中級を3人押さえてるんだ、そろそろ俺みたいなのがもう一人欲しいんだろうよ」

12話

「計算外だった、とは言わないが」

天変地異を起こした回数は数知れず。

山が平地になったとか、昨日まで無かった大樹が立っていたとか、竜巻が一国を壊滅させたとか、数えだしたら私の精神上よろしくない……ので頭から無理やり追い出す。

「危険な芽は早めに摘んでおくにこしたことは無いのだが」

マナを巻き込んで全面戦争に挑んでいいものが悩みどころである。

できるなら正式な契約を結ぶまで、本当にできるなら、一生関わりたくない。

「不可解なことが多すぎる」

「普通じゃないからな、あの男」

複数の契約は理論上不可能ではない。

ただ、それは机上の空論なのだ。

「魔物か何かか、ソイツ」

「普通の魔女だ、見た目も、力も アイツ自身はな」

自身の身の丈に合わない相手を選べば相手の魔に浸食されて、最期は堕ちる。

そして、それが複数であった場合は全員の契約者の魔の合計と対等以上の力の無いものは堕ちる。

よって膨大な量の魔を持ち合わせなければ契ることは不可能に等しい。

「魔女の血は魔そのものだったな？」

「そうらしいね。血を飲み干すことで魔を得るらしい……俺を呼

び出したのは確か3年前だ」

尊にはあった、吸血行為。

魔を奪い取るというおぞましい行為ではあるが力を増すための方法。

「私はてつきり眉唾とばかり思っていた」

「そんな悪趣味なことをする奴程小物だからな、俺らには縁が無かったんだろう」

これ以上の力を持つ前に片付けた方が確実と思うよ

それだけ言い残して、アポロンは消えた。

13話

これ以上力を持つ前に、という言葉が蘇る。

「言ってくれ」

一人なら自分以外のものを全て消せば済むが、その中のひとつだけを守るというのは実に非効率的なのである。

それならば、と考えた所で思考は中断させられる。

「何を考えているかは分からないけど、ソレは却下
いつ見てもその子供の瞳には驚かされる。」

深海のように読めないと思えば、しけた海のような荒々しさを連想させる。

「何も聞かずに判断するのはよくないよ、マナ」

そんな私の言葉にすげなく返す少年は私の提案　するつもりもなかったが　を拒絶する。

この子は15年、という短い時間で私の何を読み取っているのか私には理解できない。

けれど、ひとつ確信できる。

何があるかと、今私が考え付いた最良の方法に人のココロというものを手に抗うのだ。

何を考えているか分からない。

けれど、彼女は一人それを片付けることを考えていることは確かだった。

生憎、自分が足手まといになっている、と感じるくらいには成長している。

それまでやってきた数々の悪戯。

それらが人の視線をこんなにも集めると考え付かなかった、あの頃の自分を呪い殺したい。

ただ、少し困らせたかっただけ。それだけだったのだ。

自分とは違うものであると言い聞かせてくる彼女は確かに、大きく考え方が違っていた。

常に理性的で穏やか、それが普通なのかもしれない。

幼心に表情を変えることのない彼女に違和感と不安を感じていた。それが初めて崩れたのが5歳の時。俺が凶体のでかい男に縛り上げられた状態で対面した時だ。

最初は言いつけを守らなかったが為の罪悪感と嫌われてしまうのではないかという恐怖。

勿論、これからどうなるのだろうという不安はあったけれどそれ以上に嫌われることを恐れて塔を登ることが苦痛だった。

『お前は大人しくていい子だな』

その言葉は俺を安心させる効果を持つ言葉だった。

側に居てもいいのだと思わせてくれていた。が、その時に浮かんだその言葉は、

『大人しくていい子でなければいけない』と意味しているように感じてしまった。

対面したその時の顔は、怒り。

自分に向けられているようで、これ以上嫌われたくない一心で涙を堪えていた。

それが、男達を追い払った後に怪我を彼女自身に移し（俺の遊び道具は魔術の本であったので知っていた）優しく抱きしめられた。

それがどれ程、俺の心を救ってくれたのか彼女は知るまい。

いい子でなくても、見捨てたりはしない、自分の母でもないのに憎まれても仕方ない自分を抱きしめるその手が温かくて、我儘になつた。

もつと、かまって欲しい。自分だけを見て欲しい、なんて。

困らせれば怒られて、怒られたら反省して、それを見たウピスが仕方ないと溜息をつく。

その一連の流れには自分しかない。

ウピスは俺の特別だ。

だから、『一人で』なんて許さない。

ずっと守って貰ったように、今度は俺が

。

14話

「やられた」

少し目を離れた隙にいらなくなっている、そんなことは少なくない。昨日の今日とはいえ、即日決行の彼女の性質を考えれば当然のことでもある。

「ことが事なんだからもうちょっと時間を置くとみた俺が悪いのか」

そうか、俺が悪いのかと遠くを見る。

一人で何て許さない、なんて考えておきながらこのザマ。髪を掻きあげて、顔を顰める。

物心ついた頃から伸ばし始めた髪は肩甲骨を覆う程には伸びていた。

邪魔くさいと思いつつも切らなかつた理由は契約の対価に使う為だ。

契約に必要なものは体の一部。

契約することで人は魔女となり、力を得るのは魔女も使い魔も変わらない。

仮契約の状況がいかに危ないものを語る魔術書。

そのページは他のページよりも読み込まれているらしくヨレヨレになっている。

「仮契約、それは曖昧なものである。人界と魔界の狭間に身を置くが為に本来の力を発揮できない……そして」

いきなり苦境である。

『狩り』になると周りが見えなくなる癖をどうにかすると耳にタコが出来る程言われるがこれはどうにも……そろそろ直さなくては

ならないかもしれない。

何故、優雅にティータイムをしているのだろうか。

「主は忙しい方ですので、申し訳ございませんがこちらでお待ち下さい」

芳醇な紅茶の香りと別に目の前にいる可愛らしいメイドから魔の香りがする。

所作の一つ一つが丁寧で柔らかい様子から粗野な下級とは一線を隔てていることを伺えて、正面突破は厳しいかもしれないと予定を組みなおす。

刈り取る気で来たというのにこの扱いに正直に言えば、

「拍子抜けだ」

兄であるアポロンの魔を辿り辿り着いた先は立派な城。

身分の高い人間であるのは分かっていたのだが正直驚きだ。

「で、国王陛下とはいっ頃面会できると？」

この部屋には私以外に二人と扉の外に一人。

おそらくはアポロンの言っていた中級の三人だろう。

先程お茶を淹れてくれた彼女が困ったように首をかしげて、もう一人扉の前に立っている背の高い黒髪の女の姿をした魔を見る。

「主は午後8時まで執務室で政務をしております。それ以降になるでしょう」

事務的な口ぶりからあまり好意的なものを感じ取れない。

なんとというか、手持無沙汰の上に敵陣の中で落ち着くこともできそうにない。

口にしないままの紅茶が何度も入れ替えられる位しか部屋の空気を揺らすものは無く、空気が淀んでいるように感じる空間。

高い位置にある小さな小窓から差し込む日の光が無くなって久しくなっただ頃、ドアが叩かれた。

15話

「あなたが、主？」

目線の先に居る男はとてでもないが兄が言っていた凶悪な人物とは重ならない。

線の細さは女性と見紛う程で、こちらを見る瞳は泳いでいる上に濡れている。

瞳と同色の緋色のマントも着ているというより着られている有様。年の頃はマナと同じと思うのだが怯えたように見えるその顔は幼く見える。

「……な訳無いな」

後ろに付き従っているアポロンは私の存在なんて知らないとはかりに下を向いているので話にならない。

周りに居る三人の魔も教えてくれなさそうだ、とくれば聞ける人は一人しかいないではないか。

「君は誰？」

しゃがみこみ、視線を合わせた。

途方に暮れる。

行き先のメモがある訳でもなく、かといって契約は曖昧の為に居場所が特定でない。

魔の香りだって遠くに離れば砂漠の中の砂金と変わらない。

曖昧なものと知っていた筈だった。

いつだって、側に居て、手を伸ばせば届く距離。

必ず、戻ってくると盲目的に信じていたのだ。

「根拠もないのに」

「その通りだな。お前の怠慢だ」

後ろから聞こえた声に振り向くと彼女に似た容姿を持つ青年がい

た。

至極悩ましげである。わざとらしい程に。

「アイツ、色々と勘違いしたままでひとり飛び出すから」

「勘違い？どういうことだ？」

俺の血を奪って力を高めること、そしてウピスの従えることが目的じゃなかったのか？

「どちらかと言えば、後半よりだが……今、アイツが仮契約でフラフラしているのが一番危ない　とにかく行くぞ！」

あの男の目的は

いつもマナにやってきたように頬に手を当て、眼と眼を合わせる。

やはり人の子、温かな手は安心させるのに一番効果がある。

上気した頬、潤んだ瞳。やはり子供は可愛らしい。

「貴方が、新しいオカアサン？」

無邪気な言葉で心を揺らがすまでは。

「オカアサン？」

それは、母親って意味か？

「違うの？」

違う、と勢い良く否定しかける己を抑え込む。

「誰が、そんな話をしてくれたのかな」

予想外の事態に陥りそうである。

先程の怯えた顔が穏やかになってくる程に危機を感じる。

しかもその前に何か付いてなかったか？

「お父さんが、新しいお母さんを連れて来るって」

「ちよつと、待つて。新しいお母さんってどういうことだ」

私には理解しづらい複雑家庭なのか、と若干違う方に流されながらも先を促す。

「そこに居るミルフアもカトレアもお母さんなんだって」

そう言いながらメイド姿の魔を見る。

「そうそう、扉の所に居るアデラだってかっこいいけどお母さんだって言ってた」

饒舌になる少年の言葉に基本の穏やかな笑顔に限界が来ていることを悟る。

意味が分かって言っているのだろうか。

それって、国の頂点に居る人間が行う制度ではなかったか？

それがお父さん？実母以外の母親、愛人……ここでは妾と呼ぶのだったか。

「ここに居る三人が母、と言ったか」

色々と深みにはまっていく気がする。

「ウピスを入れたら4人だよ」

間違えてはならない、全員、少年の母とはなりえぬ存在。

もう一度言う、人外だ、人の母とはなりえない。

『ウピスが、僕の母さんなの？』

小さな村に移り住んで、ようやく落ち着いてきた頃だったか。

近所の子供が私のことを『マナの母さん』と呼んだらしかった。

それに答えたように、答えることが出来ないはどうしてだろうか。

私は人外で、お前の母にはなれないのだ、と。

「息子もすっかり懐いているようだ」

扉の向こうからこちらに向かってくる男、それがどうやら件の魔女であるらしい。

緋色の瞳に少年のような弱さを感じることも無いが、かといって兄から聞く狂気も読み取ることはできない。

「さあ、カルヴィン。向こうの部屋で遊んでおいで」

それはここ数年よく見ていた風景とよく似ていた。

遠退いて行く子供の姿を追えるところまで目で追い、声が届かない距離になった所で残された魔女と視線を合わせる。

「いい子でしょう？」

「随分と可愛がつていらっしやるようだ」

村で見た親子と変わらない、その様子がとても意外ではあったが。

「ええ、私はあの子を愛しています」

「私達には人間の感情は分からない。それでも、そんな魔達を母親にする気か？」

そんな仮初、いつか崩れるものだ。

「ソレで傷付くのはお前では無いように思うがな」

「貴方は面白い。実に面白い……まるで人間のようだ」

「順を追えば誰にでも予想は出来る」

「だから、貴方が欲しかったんだ」

全く話にならん。

「何故そうなる。私達を追いかけてまわす理由と母親探しの関係はどうした」

話がかみ合わないままでいる様子だけを取れば、キチガイかもしれない。

17話

「とんでもないデマだった」

後から追いついてきた二人もソファに腰かけ、紅茶を啜る。

「危うく殺すところだった、というか、15年前なら出会い頭にドカンだ」

歪んだ空間から二人が顔を出すと同時に兄の手から奪い取るようにマナを引き寄せる。

「触れるな」

信用ならない、というのがその場の判断だった。

「この子に傷一つでも付けたら殺す」

魔女の血を啜り、力を蓄える魔女に、その使い魔（兄含む）に囲まれた状況で安心しろというのが無理だろう。

「で、確認するが。貴様、病に侵されているな？」

紅茶で舌を湿らせ、言葉を紡ぐ。

「ええ、かなり厄介な」

「はつきり言わせてもらうが、寿命が尽きている」

この男は死者なのだ、本当ならば。

それが生きて、目の前で話している。

「知っています」

「魔女の血を啜るといっのは、それが目的か」

意味ありげな笑みに溜息をつく。

魔女は人間でありながら時に反するもの。

その源を体内に引き入れれば魔との契約ができるだけでなく、
魔女にならずとも延命できる……かなりのリスクがあるが。

それはまた別の機会として、だ。

「はい。魔女たちから少しずつ頂いて命を繋いできたのですが…

…」

状況を見れば他の魔女を当たらなくてはならない状況になったということだろう。

「断られたか」

「はい」

魔女は気紛れだ。長寿、というよりも時の流れに影響されない魔女は退屈し切っている。

力を持った古株の魔女なんかはその傾向が顕著に表れる。

「言つとくが、マナは魔女じゃない」

「アポロン、あんなデタラメ言ったのは何故だ」

あの男に危険思想は無い。

確かに頂けない趣味ではあるが、全ては子供可愛さの行動だったではないか。

子を一人残していくことに対する不安から、その前に死ぬことのない保護者を見つけることが目的であった。（勿論自分が生きて、守ることを第一に考えていたようだが）

マナが対象であったのは腹立たしいが強制ではなく、あくまで頼む形の話であった所には好感を持ってなくもない。

どちらかというと、自分の兄の方に悪意があつたように思えた。

マナの姿を背に隠し、何か不穏な動きでもしたら締めあげられるよう戦闘態勢をとる。

「ちよ、ちよつと待て。別に喧嘩売ろうってわけじゃねーって」

髪逆立てて獣か、お前は！とか何とか叫んでいたが、懲らしめてやった。

「アイツじゃねーんだよ、俺が言いたいのよ！」

朝露だけではなく草花、ありとあらゆる水分を持つものが一瞬

にして蒸発する。

「まずい」

「何か、来る？」

18話

蒸発した水分は視界を遮る靄に変わる。

「マナ、離れるな」

腕の中に引き入れ、相手を迎え撃つ準備を整えた。

靄を凍らせ、地面に落とすと氷の花咲く地面に降り立ち、微笑む男が現れた。

「会いたかった」

「私は会いたくなかったがな」

黄金の髪、翡翠の瞳。

「お前が魔女になったとは知らなかった」

そうと知っていたなら？

「僕の使い魔になつてくれてた？」

「その前に消していただろうよ」

高くも無く、低くも無い声は耳から離れない。

「随分と嫌われちゃってるね」

寂しいな、なんて言っていはいはいるがどこまで本気が分からない。

「それだけのことはしたと思わないか？」

「君に会いたいが為だけにあれだけしたんだ、少しは靡いてくれないもいい気がするんだけど」

どこまでも幼い、少年。

体だけは立派に成長し、背丈は自分を凌ぐ。

「会いたいが為だけにわざわざ戦争を起こす馬鹿と契約する程退屈してない」

今はどうか知らないが、とある国の王子だったこの男とはとある国で出遭った。

その国で遊学中だった少年はその国の軍師として雇われた魔女の使い魔に異常な執着を見せたのだ。

あの手この手で自分の側にいるとせつつく少年に飽き飽きしていたものの、私本人に言うくらいなら構わないと思っていたのだが、当時の契約者のミネルヴァに、自国の父（国王）の名を出して契約の排除を求めて来るようになった。

当然、断っていたが。

3年後、帰国したソイツに胸を撫で下ろしたものだだったが、その数カ月後、とある国に宣戦布告したのだ。

そこから面倒な話である。

国々を転々として、細々と暮らしていたというのに懲りずに属した国々に宣戦布告するという暴挙。

無駄に頭の回るその男は私達が行ける場所を狭めていく。

それに、痺れを切らしたミネルヴァはそれ以上の悪知恵で絶対不可侵の土地を手に入れたのだが。

簡略化してしまうと私のストーリーカーだ。

「つい最近まで退屈そうだったのに……その腕の中に居る子供が原因なのだろう?」

歪む顔、光る翡翠はマナを射殺さんとするように鋭い。

「だったら何だ」

「気に入らない。飄々としたその仮面を外したくて、追いかけていた女がぽつと出の子供ごときで取られるなんて、ね」

異様な空気に眉をしかめる。

「お前、何をした」

20年そこらしか生きていない魔女の力にしては視認できる程の濃すぎるそれに背筋が冷える。

「何って?君と同じことをしただけさ」

すべて破棄した筈の禁書、その最後にあるハイリスクハイリターンの術。

「ねえ、そこに居る君はこの女のどこまで知っている訳?」

19話

「どこまで？」

「聞くな、呑まれるぞ」

アイツの無駄に回る頭は口とセツトだ。

一度耳を傾けたが最後、言葉の波に絡め取られる。

「知りたいでしょう？彼女が何者なのか、今までどんな時代を生き、どんな禁忌を犯したか」

「聞くな」

自分の声に動揺が走っているのが分かる。

平静を保とうとして失敗した、隠そうとした感情が表に出る。

「彼女、自分のことは話さないから。これを逃せばもう機会は無いだろうね」

知る筈がないと思う半分、過去を塗りつぶす方法は無い訳で。

知らなくていいことだ、と言葉を漏らす中で、心では知らないままで、二人で今までと同じ穏やかな時間を過ごしたかった。

「僕は知ってるよ？」

私の動揺を楽しんでいる癖に視線的にはマナ。

声を聞かせまいとマナの頭を抱え込む。

「君も知りたいんじゃない？」

頭の中で警告音が鳴り響く。

拒絶反応と同調して、力が零れだす。

「君は僕と同じ眼をしている」

体から溢れた力が不快物質を排除しようと矢のように男に向かう。突き刺さる寸前、抱きしめる体が軽くなった。

「僕の勝ちだ」

「ここは、どこだ？」

いつの間にか知らない建物の中に居た。

声をかけるのも戸惑う程に慌ただしく走り回る白衣を着た人達が行き来する廊下には紙の束が積み重なり、また所々土砂崩れが起きている。

踏んではまずいと思いながらも体は勝手に書類を踏ん付けながら廊下を行ったり来たりを繰り返す。

声を掛けようにも意思と反して意味の分からない言葉を一人吐き続けて、しばらく。

ぴたり

空気が固まる　これは比喻でも何でも無い　ぴたりと足を止

め白衣達含む俺はそこらにある紙のひとつを掴み、起動させた。

途端に吹雪が巻き起こり、壁が凍り始める。

どうやら先程の紙は魔術を防ぐ効果があるらしい。

吹雪が収まった頃、「またか」「今度は何をしたんだろうな」な

どと囁かれるなか、事が起こった源源からひと組の男女が出てきた。

「ごめんごめん、みんな無事？」

「日頃の行いのせいで周りが物怖じしなくなった気がするな」

金茶の髪を揃いのリボンで編んだよく似た双子に直感した。

「…ウピス」

力無く凭れかかるマナを支える。

「邪魔者は消えたよ」

冷水に浸かったかのように冷えていく指先。

大量の矢に囲まれた男は状況をものともせず微笑む。

「僕を殺したくてたまらないんだろうね？」

やってみれば良いじゃないか、そう笑うのはできないことを分かっているからだ。

「初めてだね」

体温が失われていく体がフラッシュバックを引き起こす。

「僕だけに感情を向けてくれる日が来るなんて」

「向けられて喜べるなら貴様はキチガイだな」

「たとえ憎悪としても、無関心でいられた頃よりは前進だ」

この殺伐とした空気にあてられても笑って返すこの男は理解できない。

「君の関心は人と関係ないところだろうから、僕の気持ちが変わらなくたって仕方ないさ」

だから、これも分からないだろう？とわざとらしく肩を落とす。

「君になら殺されてもいいと思う僕の気持ちなんて」

「今なら私の手で殺してやってもかまわないぞ、マナの精神を返さえすれば」

本当であれば、今すぐにも刺し殺してやりたい。

「やっぱり始祖には分かるか、この魔術も」

始祖、もう何千年の時間が経っており、人間には知る者がいない筈の言葉。

「お前、一体何をした」

「お楽しみ、さ」

「今度は何をしでかしましたんですか……」
今まで独り言としか取れなかった声がいましがた現れた二人にか
けられる。

「いやだなあ、???。僕らを何だと思ってるの」

「ただ加えた力が逸れて別の器具に当たっただけだ、失敗ではな
い」

「それこの間も言っていましたよね」

いつか事故に巻き込まれて死ぬ前に遺書書いておかないと、など
と呟く自分の口。

そんな言葉から気安さを感じる 先程からの行動からして誰か
の立場にいる、という感覚がしてきた。

「でも、結構おもしろい結果が出たよ」

片手を差し出し、閉じ、開いた次の瞬間に現れたのは、

「氷？」

不思議そうな声に、にんまりと双子は笑う。

「俺たちは失敗なんかしてないぜ？」

「まあ、事故と言ってしまえばそこまでだが」
ウピスは手を裏返し、甲を差し出した。

「陣が焼き付いて……！」

昔、魔術は無から有を生むことはできないのが原則で、取りだすにはそれを表す陣を描かなくてはならなかった。

タイムラグの少ない、存在するものの形を変えて使用するのが一般的だったのだという。

「これぞ」

「人間でありながら人間を超えた初めての人間」

「今では普通のことだ」

火の無い所から火を取りだすなんてこと、今であれば契約なしでもできる。

動揺を見せれば新たな材料を与えることになるのだ、といい聞かせ無難な答えを返す。

「あれ、君にしては珍しいね。動揺しすぎて聞き逃したかな」

「人間でありながら人間を超えた初めての人間」

人間、と確かに聞いた。

ウピスが、人間。オウムのように繰り返す中でやはり受け入れにくい。

「これで足がかりが一つできたんじゃない？」

「だな。魔術の軽量化、術の安定、発動時間の短縮が確認できた」
これで他国何て一網打尽だな、と誰かがうれしそうに語った。

茫然とした俺一人を置いて周りは賑やかになる。

文章が正しく聞こえない。

聞こえているのに、頭に入ってくるのは単語ばかり。

戦争・劣勢・新兵器・実験

そして、

「人間兵器」

という非人道的な言葉。

それを嬉しそうに語る顔、顔、顔。

「これは、どうということなんだ!？」

叫んでも誰にも届かない。

「ウピス、お前のことなんて何一つ、何一つだって俺は知らない
っ」

だから、一番聞きたくて、一番聞いているのは困らせてしまうことだっ
て言える。

「俺はお前の何なんだ!」

俺にとって、大事な人はお前だけで。

お前が俺の世界で。

その世界はあまりにも大きい。

笑う彼女が遠くて、滲んで見える程だった。

21話

「君、僕が知らないと思って高括ってるでしょ」
樂しげに笑うその男の真意は読み取れない。

「ねえ？せつかく二人きりなんだから、話でもしようよ」
ふわり笑う男は先程の狂気を収め、傷付くのも気にせずこちらへやってくる。

気の遠くなる時間で感情など抜け落ちる。

私も、兄も、他の魔達と変わらない。

ただ、流れに任せて、娯楽を求める。それが、長い時を得た者たちの辿り着く所。

なのに、怖い。

「寄るな」

足は動かず、声は揺れていた。

どうやら、足がかりを得たらしい研究員（白衣の人々、では何と
いうか誤解を招く）達は自らの体に複数の陣を刻みこんでいった。

精々、一人に対し二つか三つ体のどこかに刻んだようだ。

それをあの双子は軽く飛び越す。

「所長、アンタら幾つ目ですか」

所長であるアポロンと副所長であるウピスが毎度のこと派手な爆
発を起こし、建物を揺らすしても、周りはそれぞれの持つ陣で自身
の身は確保するので「ああ、派手にやってるな」ぐらいにしか思っ
ていない。

誰かの体の動きに慣れてきた俺も、此処のことが分かってきた。

ここはどうやら研究者気質の小さな国家であること。

此処はそんな国の中心部に数ある研究所の第3号館であるらしい。

数字の若い順からエリートが振り分けられるらしく、此処の研究員たちの成績は中々のもので、最近の陣を刻むという新しい方法を見つけてからというものの上を追い落とさんとする勢いである、と耳にした。

「幾つだったかな」

「ちゃんと数えておけ、だらしない」

隣にいるアポロンを片割れがジトリとした目で見ながら、18個目だと答える。

「しつかり数えて報告書を出さないと援助が得られないんだから3号館の人間を養えるか養えないかの重要材料だぞ、という言葉。一家の長のような物言いに、現代のウピスと自分を思い出す。昔から、こんな風だったのか。

遠い、とばかり思っていた存在を誰かの体の中で過ごしていく程に薄れていく。

「俺はいないのに、な」

縮まっていない距離を錯覚しそうになる。

「君の研究、見せてもらったよ」

燃やし尽くした筈の研究所、存在ごと消し去った母国。どこにも存在しない筈の研究書類。

けれど、男の空気は魔女と言うよりも。

「なあ、お前ら、健康診断どうだったよ？」

「何だか、かなり精密な検査でしたね」

身長体重、身体年齢……などの諸々はピリピリした環境で行われた。

「当然だ。私達が直々に上層部に頼んだんだから」

いつもなら、受けない輩が多い（受ければ皆、仕事中毒でベッドに括り付けられるに違いないからである）研究員達に強制執行された裏にはウピス達の依頼があったらしい。

「頼んだ？体の不調を訴える者がいるのですか？」

尋ねると、少し言い淀んで、

「……研究員の半数近くがな」

そう言った。

視線を揺らすその姿から、俺と同様に気が付いたのかもしれない。

「まさか、副所長も、ですか？」

「明日には出せるそうだ。今日はゆっくり休めと皆に伝えてくれ」
それだけ言うと、アポロンを残して一人いなくなった。

青い顔をしたウピスが気になったのはこの体の主も一緒だったらしく、後を追う。

「副所長、そんなに動揺する程、重い病気なんですか!？」
この体と思つた以上に思考が重なるようになった。

視点も同じ。此処に本当に俺がいるように錯覚することが増えるのは問題だ。

「いや、生きている分には問題ないのだが……」

歯切れの悪さに先を促すのを戸惑うが、体は正直。

「なら、何だつてそんなに動揺するんです?」

本当は心当たりがあつて、黙っているのではないかという風に疑つてしまう。

「いや、お前には関係ないから……」

はぐらかそうとするのは丸見えだった。昔は嘘が下手だったらしい。

誤魔化されたりしない、と口を開こうとしたところで、

「……関係無いってことは、ないな」

そう言つて、一歩近づいた。

「あくまで私の推測だから、明日まで黙っていてくれ」

そう言つて、簡潔にその内容と理由を話すと足早に去つていた。耳まで真つ赤なウピス、貴重なのだが、自分も真つ赤だと思つ。

人の老いを止める可能性がある。

推測に驚かされたのは認めるが、現在のウピスがいるのだ、そんな反応はしない。

原因はその推測に至つた理由だ。

「『月のモノが来ていない』なんて」

男に言うことか!!

聞きたいと思った俺がいたんだけど、これは聞かない方が良かったかもしれない。

「僕も、君と同じ。老いない体になった」

目前に迫った男への言葉はもう出なくて、獣のような威嚇するよ
うな唸り声が響く。

「やっと同じ土俵に上れた、そうだよね」

とうの昔に役目を放棄した心臓が収縮した気がする。

「その子の手を離して、僕の手を取ってよ」

腕に抱く少年に重みを感じなくなってきた。普通は重みを増して
行くように感じる筈なのに。

「その子を手放せないなら、それはそれで仕方ないや」
笑みに再び狂気が混じりだす。

「じゃあ、彼を含む僕なら、受け入れてくれるよね」

午前の健康診断の後、半日の強制休暇が明けて、緊急招集。

その場で、副所長が検査結果を発表した。

ざわつく研究員達は一瞬にして静まり返り、それ以降一人として
声を発したものはいなかった。

それぞれが自室に戻るなか、俺は動かない。

「?????」

「あれ、どういうことですか」

震える声に彼女は、言う。

「すまない」

何に對しての謝罪なのだ、それは。

「皆の人生が無茶苦茶だ」

自責の念から、そんなことまでするのか？

「そんなことじゃないでしょう!？」

それではすまされない。

そんなこととして、責任をとるといふのか。

燻ぶる感情のぶつけ場所が無くて、目の前の彼女に掴みかかる。

「実験台になるってどういうことですか!本当にそれで良いんですか!？」

彼女が良いと言っても、未来を知っていても、そんなことは認められなかった。

「俺は嫌です!貴方が死ぬかもしれない、そんな……そんな、実験」

私と所長の心臓は止まりかけているそうだ。原因は刻みつけた陣の数だろう。

深く、頭を下げ、俺たちに伝える、推測。

2つ3つ位で人間の老いのスピードを緩めるらしい。

その十倍近くの陣を刻みこんだ二人の心臓は心停止のラインをかつつ超す程度しかないらしい。

「何で、心停止まで陣を刻むなんて、無茶する必要があるんですか!？」

「それが、私の役目だ」

所長は反対しているが、これは私が望んだことだ。

だから、反対してくれるな、と。

そう言つと、俺に背を向けて扉を潜る。

本当に独りぼっちになったようで、立ち尽くしていた。

23話

「マナ？」

マナの腹越しに呪印の刻まれた腕がうつすらと見える。腕の中にある確かな温もりはそよかぜで霧散しそつだ。

「僕達とその子、結構似てるんだよね」

私にとっては唐突に、それでも表情は狙ったように語り始める。

「おかげでシンクロも早い」

「……何が言いたい」

頬に伸ばされる手を震える手で掴む。

「この手を拒めなくなるってことさ」

彼を含む僕なら。

「もうすぐだ」

魔女でも人間でもない男に今では知る人間のいない私の過去、奪われた精神と薄れていく体。

「お前、マナを取り込む気が」

「名案でしょ？」

魔女、と言うよりは自分と同じ匂いがするのは、

「同じ土俵に上ったと言ったな」

「言ったね」

魔になったということ。

私の過去を知る者は人間にはいない。

すなわち、始祖たる自分と同じ時間を生きた魔から情報を得た筈だ。

「誰だ」

それだけで理解したらしく、笑う。

「さあ。ただ、君に近い人だね……その人が僕の一部だって聞

いたら、僕のこと、振り払えないかな？」

話が繋がった。

「過去と魔になる方法、それを取り込んで手に入れたんだな」

「所長！」

「……お前か」

振り返ったその人の元にカツカツと音を立て近寄る。

「アンタ、どういいうつもりですか!？」

掴み掛られてもその首は力なく垂れたままで、その様子に万策尽きていたのだと感じた。

「どうしてなんだ、いつものアンタなら首根っこ掴んででも連れ去るくらいするだろ！」

散々、叫んだ。滅多に流さない涙だつて流した。

「どうして、あの人なんだ」

他にもいるじゃないか。此処にも、居るのに。

「それを、アイツは望まなかった」

俺の考えを読んだかのように答えを返す。

頭にウピスと違うゴツゴツした手が置かれる。

「大丈夫だ、アイツは戻ってくる」

24話

「アポロン以外に教えた奴はいない筈だが」
悪さの為に真似する馬鹿者がいないと言いきれない。
肝心な部分は自分と渡り合う力を持つ兄にしか伝えていなかった。
あれだけ嫌っていた人物に彼が口を割る事は無い。
それならば、誰だ？

「どうしてそんなことが言えるんだ……!!」
渦を巻く感情が、まだぶつけ足りない、砕いてしまいたいと体内
でのたうちまわる。

「たく、どうしてお前は細部まで聞きたがる？それとも何だ、テ
メーはアイツに首ったけって訳か」

右から左へと流れた音を、もう一度飲み込む。

体中に音が走り抜け、音が言葉へと変換され、カチリとどこかの
スイッチを押した。

急速に世界が眩しい程の色を放ちだし、理解する。

「そうですね、俺は、好きだから」

掴んだままの襟をこちらに引き寄せ、睨みつけた。

「ずっと側にいたいと、失いたくないと」

言い淀む、その言葉さえ押さえられずに零れ落ちる。

「共に生きていたいと、望んでしまうんだ」

声に出して、ようやく自分の気持ちを体の中に収め、手を下ろす。

「よくもまあ、シスコンの俺にそんなこと言ってくれたな」

襟首を掴まれ、引き摺られる。

大人しくそのまましていると、所長は急に立ち止る。

「いつまで引き摺られているつもりだ」

冷やかな声に慌てて立ち上がり自分の足に力を入れた。目の前にはこの研究室にしては珍しい鍵付きのラボ。どうやら、そこが目的地らしい。

中に入っていくその人に続き、鍵をかける。

「これから話す内容は他言無用だ」

言葉を発する前に始末するから、と表情は朗らかに、しかし不機嫌極まりない空気を漂わせる。

「あいつが死ぬなんてことはあり得ない」

自信に満ちた言葉の数々。

いつもの実験のように話すその姿に日常の「コマを繰り広げているように錯覚してしまう。

それでも、今し方思いを認知した相手との永遠の別れという悪夢を追い払うことができない。

「信じてないな、お前」

「そうやって何度ラボを木っ端微塵にしたか覚えてますか？」
信じるというのが無理な話だ。

「そんなこと言ったって、心臓止まってんだから仕方ねーだろ」

「……今何だった」

「だから、アイツの心臓は30分前に止まった」

思わず、癖で匂いを探すと、微かではあるが感じる。

鍵をあける動作がもどかしい。

制止を振り払い、扉を叩きつけるように開くと後ろから何かに追われているかのように駆ける。

「嘘だろ？」

「立ち直りが早いね」

「伊達に何千年の時を生きてないからな」

「で？答えは出たのかな？」

師が生徒に答えを聞くような余裕の口調に、鼻で笑ってやる。

「この子の命の方が大事でな」

答えは目の前にあるのだから。

25話

扉が開かれた先には懐かしい光景の中にいる養い子。

「ノックくらいしたらどうだ、マナ」

上下する胸に駆けてきたことが窺える。

目の前にいる男の思惑通りになって堪るかという気持ちの底から湧いてくる。

「連れ去られたなら、連れ戻すまでだ」

マナの精神を取り戻してからでも答えを調べることは遅くない。

誰かの記憶はこの男の中にあるのだから、マナを探せばそれは見えて来る。

手を握りしめ心を落ち着かせると翡翠の瞳に視線を合わせ、飛び込んだ。

目を開けばひたすら続く廊下が現れた。

男の瞳と同じ色の空間は薄暗く、熱を帯びている。

そんな中で辿るのは弱弱しく金の光を放つマナとの契約印。

この先にマナがいる筈だ。

幾つもの扉を通り過ぎ、ひとつの扉に辿り着いた。

ひとつだけ深い紺の扉の中に光は続いている。

一度、失ったその色。

守ると誓った、大切な色。

瞼に隠され、見えないその色。

ゆっくりと手を伸ばし、触れた。

白衣を肩に引っかけ、ベッドから立ち上がる。

「ウピス……？」

「とりあえず、中へ入ってきたらどうだ」

まさか、此処に現在の私がいるとは思っていなかったのだろう。扉を閉め、目の前にやってきたマナの頬に手を添える。

「思っていたより馴染みが早いようだ」

どれも3000年前と違う行動にマナと体の持ち主の境界線が曖昧になっている事を悟る。

「お前の記憶だったのだな……」

そう言ったウピスは目を伏せる、その仕草に息が詰まる。

長いまつげの隙間から見えた潤んだ瞳に心を揺さぶられる。

これは懐かしさ、だけの感情なのだろうか。

泣き出しそうになるその声にあてられそうになりながら、震える手を伸ばして頬に触れる。

「泣きたいの？」

「空気ばかりが漏れ出して声が掠れる。」

「……大丈夫だ」

必死の思いで伸ばした手を下され、頬にあった彼女の手も下ろされた。

「帰ろう、元の世界へ」

此処も安全ではない。

そう言うか言わないかのタイミングで扉の向こうから銃声が響いた。

「アル！大丈夫か、俺だ！いるなら返事しろ！！」

感傷に浸る暇さえ与えてくれない、過去の兄。

そうは言っても、感傷に浸るなどしたことなかったのだが。

このままでは済まないだろう。

大人しく扉を開ける。

「何事だ」

本当は知っている。

「国の奴らが俺たちに危険集団の印を押しした」

薄暗い窓の外に蔓延る紅蓮。

銃声と爆発、軋む建物の音にああ、始まったのだなと思う。

「近々そうなるとは思ってはいはしたが」

「どうやら、^{アイツら}研究員が上訴文をだしたらしい」

詳しく言わないのは私の実験に関する事で出されたものだからだ。

「確かに。使用者に従わぬ武器は危険物だからな」

「んな、呑気に言ってる場合じゃねえぞ」

珍しく慌てる兄に、若さを感じる。

「上層部も思い切ったことをしたものだな。小さいとはいえ一国をたつた一人で落とした女がいるというのに」

半日の強制休暇の日は普段から働きづめの研究員達を休ませる為、と言うのは嘘ではない。

ただ、私のスケジュールを隠す為でもあった。

最近きな臭いと睨んでいた王国に攻め入ったのだ。

魔術を陣無しで連射するものに対抗できる筈も無く、数時間国境で足踏みしたものの王城は崩壊。

武力など持たなかった小国は異常な戦勝を大陸に名を轟かせた。

「お前が心臓を止めたことが漏れていたらしい」

用は、私から上の命令に素直に従ったと　つまりは死んだ、と確信したということだろう。

「ふん。愚か極まれり、だな」

「行動を起こすには早すぎやしないか」

「私達を道具として扱っていたんだ。いつかはこうなっただろうよ」

アポロンが正確な研究書類を出していなかったことも、この襲撃

に一役買っている。

「国を出るのにいい機会だしな」

ここから、アポロンが私達から離れることは無い。

違和感なく戻ることも難しい。

タイムリングを逃したと思いつつも、過去を変えられるかもしれないなどと思ってしまった。

囚われたのは私の方だったらしい。

「マナ、この部屋から出るな」

必ず、迎えに来るから。

正直、そう言われて素直に待つつもりは俺には無い。

つい最近、その類の盲目的信頼は意味をなさないことを知ってしまった。

「いつまでも、そんな言葉で誤魔化されると思うなよ」

単身で敵陣に突っ込んだり、普通の実験のごとく自分の心臓止めるし。

そのせいで何回俺の心臓止まりかけたと思うんだ？

いつだって子供扱いで、俺のこと無鉄砲だ、反省が足りないって言うけれど。

それ以上に危なっかしくて、人の予想の斜め上を突っ切る。

「似た者同士ってことだ」

目の前にいないと心配になる。

もう帰ってこないかもしれない、そんな不安を抱えるくらいなら。閉じられた扉に手をかけた。

手に掛けた兵士は数知れず。

失った者も数知れない。

そんな中、生き残った同志は心に影を落とした。

兄も私も例外なく、寝食ともに必要の無くなった体が衰弱するほどまでに。

燃え尽きた懐かしいラボ、王宮殿。

それが、一歩手前で保たれている。

お世辞にも綺麗とは言えなかった冷たい灰混じりの白は所々煤け、

オレンジに染まっているが、確かにここにある。

「政府軍の奴ら、俺がでっち上げた話を信じちまって後悔するだらうな」

前を走る兄の口は軽い。

けれどそういう時は強がっているだけ。

普段飄々とした雲のような人間の皮をかぶる、そんな兄は妹に弱みを見せることを嫌がる。

だから、スピードを上げ、隣に移動して笑う。

「隣に居ていい？」

いつでも、大切なものの前に飛び出せるように。もう、後悔しないように。

たとえ幻影の世界としても、もう一度。

それが駄目なら、またもう一度。

完璧に成功する現実は手に入らない。

それなら、夢の中で欲張ることくらい許してもいい筈だ。

扉を開き、政府軍と対峙する。

「やあ、元上司の皆さんと多国籍軍の皆さん」

「偉くはしゃいでいるようだが、此処が私の城と知ってのことかしら」

一瞬にして鎮静された炎の代りに木々が生い茂り、その木々には蔭が這い上っていく。

「これ以上、荒らすというならば
言葉を遮って閃光が走った。」

27話

ぐい、と後ろに引かれる腕にバランスを崩し、硬い床に背中を打つ。

原因を見上げててもその人はこちらを見ない。

「下がってる」

と、ただ一言。

「俺の後ろに居る」

先程と違う口調に嫌な予感がした。

体をずらして前を見ようとすると

「見るな」

視線をずらさない兄の横顔は厳しい。

「お前は……知らない方が良い」

先程まで立っていた場所に出来た地面の抉れ。

銃弾などでは無い。

例えるなら食虫花だ。

その場にある者を地中奥深くへと引き摺りこみ、消化しようとした形跡。

明らかかな殺意を感じ取ってしまった。

「哀れだな」

確か、私に実験と言う名の死刑宣告をした宰相閣下の声。

「必死に守ってきた部下に」

聞くなと声を張り上げる兄の声の隙間から入り込む冷氣、それに引き寄せられるのが分かる。

「裏切られるなんてな」

部屋を出た途端、何処からともなく現れた火の玉。

俺を焦がそうと追ってくるそれから距離を取り、振り返りざまに指先から飛ばした少量の水で撃ち落とす。

「しつこいな」

先程から度々現れるそれに苛立ちを隠せない。

鼻を頼りに最短距離を走ろうとするのを妨害するそれ。

撃ち落として駄目なら、と水柱でやや強引に防ぎ、ずれてきた進路を修正する。

と、目の前を通過する銃弾や魔術。

それをいなして、気絶させることは難しいことではないがロスタイムであることは間違いない。

「魔術のレベルが低くて助かるけど」

それを繰り返すうちに火の玉の数は一つずつだったのに二つ三つと増えて来る。

道を塞がれ、空いた道を走る。

身を起こし、よろよると立ちあがる。

見えたのは見知った顔、顔、顔。

「知らない」

こんなことが起こっていたなんて、知らない。

聞いてない、こんなこと。

恨まれただろうこともその理由も分かる。

誰も、そうとは言わなかった。

「黙っていたの？」

私が、動揺すると思っつて？

「兄さん、黙ってないで、答えて」

黙ったままの兄に手をかける。

一向にこちらに目を合わせない兄は、しばらく逡巡した後口を開いた。

「

悪い」

望んでいなかった答えに足元が崩れおちる気がした。

それでは、何か。

長い間、彼は私に嘘をつき続けていたということか。

長い間、私は同僚達の恨みに見て見ぬふりをして穏やかな日々を望み、享受してきた訳か。

「そっか」

知らなかった、というのは嘘だろう。

それだけのことはしているのだから。

それをひた隠しにしただろう人を思う。

別にアンタが悪い訳じゃない。

だから、謝罪の言葉はいらない。

許しが欲しくて言ってるんじゃないのも知っている。

ただ、引っかけかりが現実になっただけだ。

「悪趣味な」

俺の前を漂い、誘導する火の玉に吐き捨てる。

「最初から誘導するならするで別の方法を選べ」

火の玉の意図に気付いたのはつい先程だ。

あまりにもしつこい追い立てに数度望まぬ道に入ったが、そこに障害物は無く。

足を止め、まじまじと観察したソレは誰かを彷彿とさせるアイスブルー。

思わず零す悪態に額を小突かれたのは二回や三回では無い。

『出来るならやってい』と抗議しているような気がする。

おそらく、何か理由があるのだろう。

「気に食わないのはお互い様なんだろうな」

俺を案内するという事態に焦りは募る。

光が見えたのは曲がった角を数えるのをやめ、方向が分からなくなっただけのことだった。

青い炎が照らす廊下にオレンジが混ざる。

その中でふわり、と揺れる白衣の裾が見えた。

ゆらり、鋭く光る落雷に照らされて影が揺らぐ。

体勢を崩し、倒れ込んだウピスを見て、心臓が痛いほどに体を打つ。

ひらり、とゆっくりとした動きに合わせて白衣の裾が揺れる。

立ち上がりはしたものの、その様子は誰かが支えなければ不安定で危なっかしい。

ふわり、と垂らした髪が流れる。

モスグリーンの瞳と確かに目が合った。

「
」

あと数メートル、口の動く様子がよ認める距離。

それなのに光を塞ぐ壁が出来ていく。

走りっぱなしで限界を迎えている足にさらに鞭を打っても、それを上回るスピードで壁は織られていった。

振り上げた腕を力の限り壁に振り下ろすが、柔らかな弾力が拳を拒絶する。

「くそ！何でだよ！」

いつかは自分を守るために蒔かれたものの完成品が、皮肉にも今、
障害として目の前に現れた。

「何を……」

吐血する、兄を見る。

「私が、そんな嘘を許すと思うか」

目を見開き、されるがままの背中を容赦なく蹴り飛ばす。

この世界に嘘は無い。

ただ一つあるとするならば、目の前の男のみ。

「全く、貴様はどうしてこうもこうも至らぬことを思いつくんだ、え？」

突き刺さる緑から流れ出る赤が白衣を浸食していつても大した感情を抱くことない。

ぐったりとしたその体に近づき、足で転がす。

右胸を貫通した蔓は意志通り元いた土の中に消える。

「まだ、大根芝居を続ける気か？」

力を失くした体に声をかける。

閉じられた瞼がすつと引き上げられ、体が溶けた。

器を脱ぎ捨てた本体がむくりと起き上がり、体に着いた土や枯れ

葉を払いながら立ち上がる。

「完璧だと思っただけだな」

「ふん、それは貴様の中でだけだ」

実際のところは最初から確信していた訳では無かったが。

本物の過去に本物の登場人物、その中に3つ 否、4つか

自身の意志を持ち動き回る存在。

それらはこの世界の秩序と異なる。

「これはあの子の器の記憶だな？」

この世界に関係しないマナがこの世界に存在できるのは偏に器の力だ。

「君の推測通りモルス^{???}の記憶だ」

正式な名はモルペウス。

この内乱の跡、兄とモルスを含む数人の同僚は私同様に人としての生を捨て、私同様に心臓を止めた。

移り住む際に人間として生きた名前を捨て、それぞれの力を神々になぞらえて新たな名を付け、異空間に住みつき、現在に至る。

人の領域を超え、母国を滅ぼしたことを忘れる無^背いように神話に例^{神行為}えることで自分達に罰を与えたのだ。

攻撃に特化していた兄と私は弓の神　アポロン、アルテミス
夢を操る事が出来た彼はモルペウスと名乗るようになった。

そんな彼を飲み込んだのであれば過去の記憶を少々改竄するのも可能だろう。

「アポロンの契約者でもあれば皮を被ることもできるだろうし」
私が自由に動けるのは自分の体だからということも引いてもおかしな部分が多々ある。

「あくまで過去のことだからな、それに反する動きは出来ない」
私は、研究員達の政府軍に居たことは知らなかったし、政府軍や多国籍軍と正面衝突した場面は存在しなかった。

「私の保護対象を引き込むことで、貴様に攻撃が出来ないからと言って私が何もしないとは考えないだろう。私が中に入ることは予想済みだった、そうだろう?」

ソレくらい頭の回る奴でなければ、ミネルヴァから力技を引き出せる筈がない。

だからこそ、マナと力を発揮できないであろう兄を切り離れたのだから。

「そのつもりでおびき出したからね」

「あの親子もお前の子飼だな」

本人達は血を分けてくれた親切な魔女か何かと思っていたんだろ
うが。

「あの子の情報を流したのもお前だろう」

どうせ、娯楽のひとつ。

良いように動かして、用が済めば捨て駒だ。

「アタリ。僕としては此处でショックを受けて溶けちゃうの期待してただけど」

溶ける 精神不安定による事故の喪失を指す という現象だ。

「残念だったな。無駄に年食っては無い」

その幻影の中の登場人物の精神の一部になる場合と跡形も無く消える場合の二種類がある。

「で、次はどうする気だ？」

ミネルヴァといた時のようなゾクゾクとした感覚に身をゆだねる。ここまで仕掛けてきたのだ、本気で狩り取ってやろう。

手に入れる為には手段を選んではいられない。
奪われるくらいなら、己の手に掛けてしまおう。

定期報告の度に伝わってくる彼女の様子から、養い子にしか興味が無いということは分かっていた。

それが、堪らなく面白くない。

あの女が力技で作り上げた絶対不可侵領域に引きこもりつきりで情報が入って来ないのにやきもきしたこと数十年。

入り込む手だてを見つけ、入り込んだら、視線を一身に集めてい
る人間。^{うごも}

アイツを見つけた時はただの暇つぶしだろうと思っただし、たとえ
気に食わないとしても一時の感情でその人間に危害を加えれば後悔
する、と言いつけさせた。

もう、拒絶など、されたくは無かった。

数千年を生きる彼女からすれば人間なんて突風のようなものだと
思っていた。

一瞬だけ意識を奪い、忘れられる……そんな存在だろうと。^{もの}

見た所、印だつて穴だらけでお世辞にも契約とは言えぬ代物だ。

そんなものは上書きしてしまえば済む。

平和な世の中で力を持つものは減り、まともに契約できる
素質のある奴らは希少な存在になった。

そこで打開策として生み出されたものが仮契約の印。用は魔と契約する際、術者の力が足りていない場合に使われるものだ。

比較的新しく、弱い魔術なので破ることも難しくない。

まだ、城に閉じこもっているままなら、こんなに心掻き乱されることは無かったのだ。

外に出れば容易に調べが付く簡易魔法。

彼女ほどの力を持つ者になれば穴を突き、破棄することくらい容易い。

わざと、その資料を彼女の眼に入るように紛れ込ませても、変わることは無かった。

ここまでできて見ぬふりをして隅に追いやった可能性が頭をもたげ始める。

あの子供と契約を交わすのではないかと。

その声は日に日に大きくなっていった。

「僕としてはこの辺で終わりにしたかったんだけど」

ぎこちなく笑うその様子に引っかかりを覚えるものの、相手はあの策士。

気を抜くことは許されない。

景色が揺らぎ、森が、壁が砂山が風に攫われていくように消えていく。

「できれば、後ろの子に取り次いでもらいたいんだけど」

今度は口元を緩く持ち上げ、胡散臭い笑みを浮かべる。

「アポロン」

背を向けても分かる。

アイスブルーの魂が私を不安げに見ていることが。

「後生だ」

無茶を言っていることも、妹に甘い彼を利用していることも知っている。

「頼む」

無理やりこじ開けた穴に一人を取り込み、幻想世界から追い出した。

「邪魔な奴はいなくなった、お望みどおりだろう」
右の口角を吊り上げる。

ここがこの男の精神世界ならば勝機は薄い。
皮肉なものだ、猪突猛進の私が冷静に自分の勝率を計算をするなど。

それが分かっているにも掛けるところは私らしいところだが。
息を吐き出す、その時だった。

ぞわり、突然肌が泡立った。
何も存在しない空間に冷気が吹き込む。

「……どうして」
歴戦を超えてきた無骨な手が荒々しく髪を掻き上げ、力無く垂れ下がる。

「どうして」
頭を垂れている為に表情は分からない。
地を這うように低い、しかし足元に広がる霧のように掠れた声。
先程までの恐怖が嘘のように溶けたすままでに弱弱い。

「何で笑っていられるんだ」
拳を握ることで押さえていた震えも、いつの間にか止まっていた。
「お前の逃げ道を確実に塞がれているんだぞ」
その通りだ。

「追い詰められているのに、何故そんなに余裕でいられる？」
今、客観的に見て私は狩られる立ち位置にある。
意識を隅々まで行き渡らせようとするものの果てなく続くここに
綻びは見つからない。
優秀な箱だ。

二人を放り込んだひびは男の追及を断ち切るために私自身の力で

閉じた。

それを締め取り、より強固な箱を作り上げている。

「感嘆しか、出ないだけだ」

今もなお、書き換え続けられているこの箱、例えるなら編み物。ふと、袖を引かれるかのように思い出す。

一度だけ挑戦したことがあったか。

『母親』と呟く子供の声に寂しさの色を見つけた、酷く寒い冬の歳。

私は少しばかりそれらしく振る舞ってみようかと気紛れを起こした。

そこで習ったソレは編み目の解き方。

正確には編み方を習いに村の女達のところに通ったのだが編み目を覚えられず、何度も解く羽目になり、結局習得したのはそれだけだった。

苦笑しながら手を添えられ、教えられたのは

一番最初の編み目から解くこと

「大した才能だな」

最初に遊べばかなりの時間がかかる。

短期一点集中で切り崩すのも一つだが、此処まで精密に、また複雑に編まれた術を壊すことで何が起こるかなど分からない。

五体満足で生還したいというのが本音だ。

それに、此処まで大掛かりな術を壊せば術士の命も保証は出来ない。

「甘くなつたものだ」

そこまで考えて、随分と穏やかな方法に苦笑せざるを得ない。

川底の岩もいつかは角が取れ丸くなると聞く。

仕方あるまい、それだけの時は流れたのだろう。

両手を温める様に擦り合わせる。

息を深く吸い、瞼を閉じかけたその瞬間に微かに聞こえた。

「何が違うんだ」

俯いたままの男に世界が揺れる。

男の不安定な感情に反応しているらしい。

「難しい問題だな」

「……アンタに聞いた俺が馬鹿だった」

ふてくされたようにそっぽを向く男は青年と言っよりも少年のようだ。

「お前とあの子は少し似ているからな」

先程の仕草を含め、どこかしら共通点はあるようだ。

仕方ない、と溜息を吐き、足を浮かす。

面と向かって私を傷つけることができないということも共通点だろう。

解析は序盤だが織りこまれた術に出来るならば傷つけたくないという意志が読み取れる。

「お前も変わったのかもしれん」

マナに手を挙げたのは置いておけばむやみな殺生はしなくなった。いつか、してやったように頭を撫ぜる。

「グスター、大丈夫だ」

32話(前書き)

更新期間がかなり空きました。

ペースが落ちるかと思いましたが完結目指して頑張りますので、お付き合ひよろしくお願ひします。

32話

「正確に言えば、あと少し登って来てくれるとありがたい、だがな」

「は？」

見下ろして来た筈の男を見上げる。

「ま、お前はまだまだ子供だからな。これからがあるだろうよ」
最初は人の顔を伺うように見上げ、次は他を見下すように踏み
じり、今は他の歩んできた道を辿り、同じ位置に立とうとする。

「人間は生きている限り成長するものだからな」

人間の唯一と言っていい美德。それは、『成長』ではないかと私
は常々思う。

赤子は生まれ出た瞬間に呼吸という技術を手に入れる。食事を覚
え、地を這うことを本能で理解する。未知の振動を言葉だと理解し
操るようになる。

ただ解せぬのは、成長するうちに取捨選択をすることだ。
自身が地を這い続ける存在であることを忘れてしまう。

ただ、願うのは私と同じ轍を踏まないでいてくれることだ。

「絶望の先にも、道は続いていることは忘れないでいて欲しい」
されるがままでいた男は俯いたまま、じとりとした目を向ける。

「何が言いたい」

拗ねたように口をへの字曲げて見せる男はいつの間にか少し背が
縮んでいた。

「言葉通りの意味さ。世界に絶望しても世界はお構いなしに回り
続け、その上に居るお前たちは目に見えずとも一定の歩みは進めて
いる筈なのさ」

そう。その場で足踏みしているようで、一秒後には違う景色が映

るようになってる。

「わけがわかんないよ」

目を逸らそうとする幼子に合わせて身を屈め、笑って見せる。

「要は、私が間違っていたと言いたいのだよ。グスターヴァス」

人は堕ちたらそれで終わり。自分を切り捨てたように他人^{かれ}を切り捨ててきた。

「お前を見誤っていた、すまなかった」

情けない程に震える手を伸ばす。後退する小さな体を引き寄せる。

初めて会ったのは亡国の庭園。

こちらに視線を超越す小さな少年を暇潰しがてら話し相手にしたことから始まった関係だ。

最初はその小ささに加え、整った顔立ちから少女と思っていたのだが、話すうちにどこか大国の何番目かの王子と判明したのだが。

自分には何も無い、そう断言する悲観的な考えを持つ彼の中には幸せになる構図は存在しなかったように感じる。笑うのが下手で、めそめそした子供は気付けば隣を陣取っていた。

生きているのか、死んでいるのか分からない。それが、グスターのあの頃の印象だ。

どうやら、本質は変わらないらしい。

「お前、どちらにしる死ぬ気だったんだろう」

私が靡くことを考える程楽観主義でもなければ馬鹿でもない。

あわよくばマナも道連れには考えたかもしれないが、私と自身の力量を測り間違えることも無かるう。

私を取り込めば魔力の容量オーバーでグスターの体は砕け散る。

「私を挑発しようという魂胆だったのか？」

大人しかかった子供が腕の中からすり抜け離れた。

「そっだよ。自分のものにならないなら、押しつけようと思ったんだよ！」

私に殺させることで、自分の存在を刻みつけようということだったらしい。

「ロマンチストなことだ」

「結局はそうなるんだ」

死にたがりの声は未来を知っているかのように聞こえた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5687w/>

魔女の遺産相続

2011年12月11日04時10分発行